

平成 30 年 9 月 4 日現在

機関番号：37119

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04581

研究課題名(和文) 医療保育、病弱教育に関する多職種合同研修システムの質的向上・普及の研究

研究課題名(英文) Planning and verification of collaborative training programs for qualified professionals helping children under medical treatment

研究代表者

谷川 弘治 (TANIGAWA, KOJI)

西南女学院大学・保健福祉学部・教授

研究者番号：80279364

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：病気の子どもと家族にかかわる保育士、教師、看護師等の協同的学習はニーズに即した実践力を向上させるとの考えから、多職種合同研修プログラムを作成、実施してきた。その結果、研究期間内にリーダー育成プログラムを含む5つの研修プログラム集と1つの研修資料集をホームページに公開できた。研修実施に並行していくつかの調査研究が企画され、保育士と教師の語句使用、対話モデルによる実践プロセス評価という2つの研究成果は研修プログラムに取り入れられた。また2017年9月17日開催の研究報告会において持続可能な多職種研修を支えるもの、職場における協働による学習の展開のためにできることについて議論を深めることができた。

研究成果の概要(英文)：On the hypothesis that collaborative training for qualified professionals such as nurses, education and care workers, and school teachers is effective to develop their practical abilities, we planned collaborative training workshops and carried out to verify effectiveness. Personal interviews and focus group interviews with education and care workers and school teachers were also performed to inquire change of verbal expression of these professionals after getting positions of hospitals or schools for health-impaired children. The results showed thoughtfulness of them to help children under medical treatment and their families. Assessment method of interaction and process quality of professional practices were suggested. Finally, 6 multi-disciplinary training programs were released on the homepage (URL http://kota.la.coocan.jp/index_seminar.html).

研究分野：特別支援教育

キーワード：医療保育 病弱教育 小児看護 多職種協働 研修 協同的学習 対話 リーダーシップ

1. 研究開始当初の背景

医療保育専門士資格認定の開始、特別支援学校教員免許取得課程における病弱教育関連科目開設大学の増加など、当時の状況を踏まえ、医療フィールドで働き出したときから相談や研修の機会が身近にある状況をつくること、保育支援と教育支援の質向上に向けた実践知の集約、整理、検証が求められることから、平成 21(2009)年度に本研究の前身が企画された。コンセプトは次の通りであった。

- ・ 地域性：研修の場が身近にあることで、日常的交流と現場の問題解決に繋げやすい
- ・ 持続可能性：研修の場が持続する
- ・ 系統性：系統的に学ぶことで成長過程を確認できる
- ・ 実践性：ロールプレイなどを取り入れ実践的に学ぶ
- ・ 多職種協働：目標と実践を共有しうる多職種が共に学ぶ
- ・ リーダー育成：保育士・教師・看護師らが自らの手で研修を行う

2011 年度から科学研究費補助金を得て全国 4 カ所の地域の特色を活かした多職種合同ワークショップ「病気の子どものトータルケアセミナー」(以下、セミナー)及び特定の職場又は職員を対象とした研修コンサルテーションを実施し、研修の企画・運営・評価のノウハウを蓄積し、研修ガイドラインと研修プログラム集を公表していった(研究課題「医療保育士・病弱特別支援教育担当教師の専門性向上のための研修システム構築」課題番号 23531321、研究A)。

本プロジェクトは自ずと医療保育と病弱教育の実践方法論や多職種協働論を追究することに繋がっていった。たとえば急性期病棟保育士の研修コンサルテーションを通して作成、利用し始めた個別支援計画フォーマットはセミナーで用いられ、より適切なものへと更新されたのちに、研修プログラム集第 2 集に収載された。また、セミナースタッフの繋がりから病弱教育事例の多職種検討会が組織され、医療保育や病弱教育の遡及的研究が始められた(遡及的研究、研究B)。さらに、多職種協働を進める上で各専門職の言葉の使い方に関する調査研究が始められた(ことば研究、研究C)。

本研究の開始時までには研修ガイドライン第 2 版及び研修プログラム集第 1 集から第 4 集(表 1)を作成できたが、さらに追加が必要とされた。また、研究B及び研究Cの成果を活かした研修プログラムの更新あるいは開発が必要と思われた。

表 1 研究開始前までに作成された教材類

第 1 集：子どもと家族の心理社会的問題の理解と支援
第 2 集：個別支援計画の立案と実施
第 3 集：子どもの笑顔を引き出す多職種の連携と協働
第 4 集：子どもの発達を多職種で考える

さらにプロジェクトのコンセプトからは、研修参加者が職場や地域でそれぞれのリーダーシップを発揮し、協働による学びの場を創るようになることが望まれる。協働による学びの場を創る力の内実を整理し、リーダー育成に繋げることが求められていた。

2. 研究の目的

本研究は、プロジェクトにおいて構築してきた多職種合同研修システムの基盤を固め、保育士と教師の専門性を向上させる要となる下記の諸課題を達成することを目的とする。

- ア) 多職種合同研修のリーダーを育成する研修プログラムを作成、検証し、公開する。
- イ) 多職種合同研修で使用する教材類の質的向上を目指して下記に取り組む。
 - ①研修ガイドラインとプログラム集のブラッシュアップと追加、基礎的内容の AV 資料化
 - ②小児慢性疾患患者の自己形成過程における医療保育と病弱教育の影響を検討し、研修内容に反映させる(研究B)
 - ③研究Cの成果を研修内容に反映させる

3. 研究の方法

主な方法は下記の通りとする。

- ①目的ア) に関して保育士、教師、看護師を研究参加者とするフォーカスグループインタビューを実施する
- ②目的イ) ①に関してセミナーを開催し、研修プログラムを実施、検証し、ブラッシュアップする
- ③目的イ) ②に関して、病弱教育の影響について小児がん経験者を研究参加者として面接調査を実施する。医療保育については、実践のプロセス評価の枠組を検討する。
- ④目的イ) ③に関して、研究Cの成果をもとに研修プログラム集を作成する
- ⑤「病気の子どものトータルケアセミナー」を媒介とした研究報告会を開催し、関係者の意見を得る

表 2 研究期間内に作成された教材類

<研修プログラム集>
第 5 集：安全管理と感染管理の理解 自信を持ってかわるために
第 6 集：子どものための夢の病院をつくろう～改善活動の手法を学び、実践に活かそう
第 7 集：子どもの遊びと遊び活動
第 8 集：表現力を高める 医療現場での対話と実践を振り返り、共有するために
第 9 集：小児医療の現場で多職種が連携・協働していく為に求められること
<研修資料集>
第 1 集：子どもと遊び 遊びのイロハ～子どもにとっての遊びの本質とその必要性を見つめよう!
<研修用動画>
あそびの場面 (入院中・回復期)
あそびの場面 (在宅の重症心身障がい児)

4. 研究成果

1) 研究の目的ア)に関する成果

リーダー育成プログラムとして研修プログラム集『第9集：小児医療の現場で多職種が連携・協働していく為に求められること』を作成し、研究代表者のホームページに掲載、公表した(表2)。

2) 研究の目的イ)に関する成果

(1) 目的イ) ①に関する成果

研修プログラム集として『第5集：安全管理と感染管理の理解 自信を持ってかかわるために』『第6集：子どものための夢の病院をつくろう～改善活動の手法を学び、実践に活かそう』『第7集：子どもの遊びと遊び活動』を、研修資料集として『第1集：子どもと遊び 遊びのイロハ～子どもにとっての遊びの本質とその必要性を見つめよう!』を作成し、研究代表者のホームページに掲載、公表した* (表2)。そのほか、重症心身障がいのある子ども、虐待を受けた子ども、発達障がいのある子どもの理解と支援に関する研修資料集を編集中である。

『多職種合同ワークショップ実施ガイドライン』のブラッシュアップに関する成果としては、研修を評価する視点として以下を提案し、上述の研修プログラム集に収録した。

- ①参加者の自己評価の視点
- ②グループワークのプロセス評価の視点
やロールプレイの振り返りシート
- ③セミナー運営の評価の視点

『多職種合同ワークショップ実施ガイドライン』の改定につなげていきたい。

基礎的内容のAV資料化に関しては、上述のように病院や在宅における遊びと遊び活動をテーマとする研修を行うための研修用動画2種を作成した。研修の企画運営の動画作成は時間不足で完成に至らなかった(表2)。

(2) 目的イ) ②に関する成果

入院治療中に小学部あるいは中学部で病院内教育を受けた経験をもつ18歳以上26歳未満の小児がん経験者を研究参加者として半構造化面接法による調査を実施した。調査期間は2016年6月～2017年9月であった。その結果は2018年度中に日本特殊教育学会、The Annual Conference of International Society of Paediatric Oncology等で発表を予定している。あわせて研修プログラムの内容に成果を反映させる作業を行う。

医療保育の効果については、実践のプロセス評価の枠組として対話モデルを提示し、研修プログラム集『第7集：子どもの遊びと遊び活動』及び『第8集：表現力を高める 医療現場での対話と実践を振り返り、共有するために』に反映させた。

(3) 目的イ) ③に関する成果

研修プログラム集『第8集：表現力を高める 医療現場での対話と実践を振り返り、共有

するために』を作成し、研究代表者のホームページに掲載、公表した(表2)。

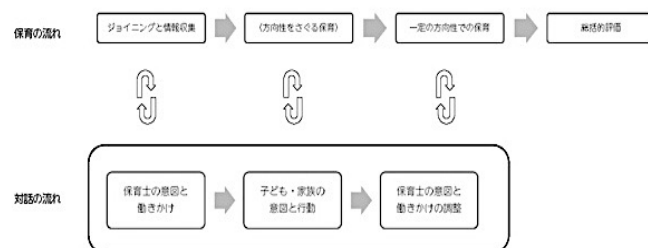


図1 対話モデルによる実践過程の説明

表3 研修課題と研修プログラム集の対応

A. 基礎的な知識とスキル	
①②医療保育, 病弱教育の意義と方法	P 第7集: 子どもの遊びと遊び活動 S 第1集: 子どもと遊び P 第2集: 個別支援計画の立案と実施
③チーム医療	P 第3集: 子どもの笑顔を引き出す 多職種の連携と協働 P 第9集: 小児医療の現場で多職種が連携・協働していく為に求められること
④対象理解	P 第1集: 子どもと家族の心理社会的問題の理解と支援 P 第4集: 子どもの発達を多職種で考える
⑤疾病と治療の理解	重症心身障がいのある子ども, 虐待を受けた子ども, 発達障がいのある子どもの理解と支援について作成中
⑥職場の理解...(施設に依存する課題)..	
⑦地域との連携	重症心身障がいのある子ども, 虐待を受けた子ども, 発達障がいのある子どもの理解と支援について作成中
⑧コミュニケーションスキル	P 第8集: 表現力を高める
⑨セーフティマネジメント	P 第5集: 安全管理と感染管理の理解
B. 個別支援計画と実施	
	P 第2集: 個別支援計画の立案と実施 P 第7集: 子どもの遊びと遊び活動 P 第8集: 表現力を高める
C. 家族支援	
	P 第1集: 子どもと家族の心理社会的問題の理解と支援 P 第2集: 個別支援計画の立案と実施
D. エンドオブライフケア	
	P 第2集: 個別支援計画の立案と実施
E. 管理運営	
①組織運営の進め方...(施設に依存する課題)..	
②③業務の計画化と見直し, 業務改善活動	P 第6集: 子どものための夢の病院をつくろう
F. コンサルテーション・スーパービジョン	
	該当なし

凡例 P: 研修プログラム集, S: 研修資料集

(4) 対話モデルについて

実践の質を高める熟練者として成長する上で振り返りは重要であるが、セミナーを通じて実践のプロセス評価の枠組を明確に示す必要性が生じてきた。

1年間を見通して子どもたちとかわる保育所保育や学校教育に比べ、病棟保育や病弱教育の実践は新たな対象との出会いが続き、対象の個性が強く、課題は焦点化され、日々の状況変化に柔軟に対応しなければならないという特性を有している。研究代表者らはこのような実践過程を統一的に捉え、評価する枠組として**対話モデル**を提案した(図1)。

対話モデルによる実践評価について病棟保育の実践報告を素材として検討を行い、学会誌に投稿、掲載された(谷川弘治2018)。またすでに述べた通り対話モデルは、「遊び活動」と「医療現場での対話と実践」をテーマとする研修プログラムに採用された。

本課題は2018年度西南女学院大学保健福祉学部附属保健福祉学研究所共同研究費を得て、さらに検討を深めている。

3) 研修プログラム開発の到達点と課題

2009年度から本研究の研究期間終了(2017年度)までの多職種合同研修プログラム開発を総括するために、研修ガイドライン第2版に示した研修課題と研修プログラム集等の対応関係を整理した(表3)。ガイドラインに示された研修内容のうち、施設の違いを超えて多職種で学ぶことが相応しい研修課題については、その多くをカバーできたと考えられる。

ただし、「F. コンサルテーション・スーパービジョン」をはじめセミナーで取り上げながら研修プログラム集等にまとめられていない項目が残されており(下点線部)、作成を継続していく必要がある。

研修ガイドラインについても、対話モデルの提示による実践評価の導入、多職種研修の評価の視点の導入など、ブラッシュアップのための作業が進められた。今後、改定版の公表に向けて作業を継続していきたい。

4) 持続可能な多職種研修を支えるもの

本プロジェクトは病気の子どもと家族にかかわる専門職が施設や職種の違いを超えて学ぶ状況づくりを追究してきた。その過程では必然的に、医療保育や病弱教育の実践を捉え直す枠組や視点を検討することが求められてきた。その結果、急性期の子どもの**個別保育計画シート**の検討、ことば研究による対話における課題の検討、対話モデルによる**実践プロセスの評価**の検討などが行われてきた。これらは研修プログラム集に収載され、研修の企画・運営のために活かしている状況となっている。実践の質を高める研修と研究は車の両輪であることは今後も大切にしていきたい。

最終年度に開催した「病気の子どものトータルケアセミナー」を媒介とした研究報告会(2017年9月17日実施)において研究分担

者である山口(中上)は、大阪セミナーにおいて多職種による**協働による学びと発達**の場を提供するために「組立としては原理、理論、思想など、本質的なものをテーマとするように気をつけている」として、**継続的質改善活動**や**遊びの本質**などをセミナーで取り上げてきたと述べている。福岡では、近年病院だけでなく**地域で働く多職種の参加**を促す意図をもって重症心身障がいのある子ども、虐待を受けた子ども、発達障がいのある子どもを取り上げてきている。いずれにせよセミナースタッフは研修のテーマ、内容、方法を整理するにあたり、つながりをもちたい専門職の状況を共有し、ニーズを明確化し、テーマを決定する作業に時間をかけてきている。このような中で**多職種研修のノウハウ**が蓄積され、継承されてきていることを大切にしたい。

研究報告会では、セミナースタッフの集まりに加え、地域で継続的に開催されている情報交換会や研修会の実施組織について紹介された。それらの議論を踏まえ、持続可能な組織運営につながる取り組み方として次を挙げておきたい。

- ・ 企画運営の責任をもつスタッフ(コーディネーター)は交代することで負担を分散させる
- ・ その他のスタッフは、それぞれの状況に応じてできることに参画する
- ・ 情報共有や日程調整はSNSが用いられる(会議等の日程は早めの調整が必要)
- ・ 新しいスタッフを求める

医療現場で変則的勤務をこなすボランティアに基づいて企画運営に参加するスタッフにとって、負担の分散による**緩やかな参加**は事業の継続に欠かせない。一方、準備作業や当日の進行のように力を集中すべきポイントでは、最も負荷がかかるグループワークファシリテーターを含めて、コーディネーターの調整に対して積極的に役割を引き受け、チームを維持し、目標の達成に向かう姿がみられてきた。これらはスタッフメンバーそれぞれのリーダーシップの表現形と考えられる。

谷川は福岡セミナーの4名のスタッフに対する面接を行い、スタッフであることの効果として4点を抽出した(濱中・甲斐ほか2018, 32-34)。

- ・ 医療保育士の専門性向上への自覚の形成
- ・ 知識と技術、実践の視点の獲得
- ・ チームングスキルの獲得
- ・ 職場での研修の企画運営につながる

職場を離れて行われるセミナーの企画運営における学びは、各々の職場での実践にも環流されていくことは、セミナーが継続する原動力の一つと考えられる。

さらに、講師を引き受けてくださったり情報提供をしてくださる専門職の方々の存在、セミナーを職員研修の一つとして位置づけてくださる職場の存在など、セミナーをめぐるネットワークの広がりについても大切にしなければならぬ研修システムの要素である。

5) 職場における協働による学習の展開

病気の子どもと家族にかかわる専門職の学習は、対象である子どもと家族に対する実践の過程で生ずる個人の認知と行動(相互行為)の変化、専門職間の相互行為の変化など、と考えることができる。実践の過程は、一事例への実践と担当チームの協働の過程だけでなく、実践事例の積み重ねの過程、年度はじめの計画から年度末の振り返りの過程など多様な局面で構成される。研修会は実践の場を離れた学修の場であるが、これも実践過程の一局面を構成すると捉えることができる。これら実践過程の総体を協働による学習の場と捉えていく必要がある。研究報告会では、所属部署や雇用形態(常勤と非常勤)、組織(病院と学校)を越えての情報共有における制約、病棟に入る教師が感染防御の研修対象とされていないなど研修の制約などが指摘された。これらに対して、少なくとも一職員として関係者とともに自分にできることの探求、組織におけるシステムの改善という二つのベクトルが存在する。研究報告会では一職員として学習された認知と行動の例がいくつか示された。

- ・ 代諾者の了解を得て情報を提供する
 - ・ 伝えたいことは対面して、口頭で伝える伝え上手になる
 - 子どもと家族の伝える力に依拠する
 - ・ 子どもとかかわる場を直接共有する
 - ・ 世間話を含め、日常的に他職種とコミュニケーションをとる
 - ・ 他職種の専門性と役割を理解し、求めていることに応える
 - 後工程(引き継ぐ人の業務)を考慮する
 - ・ 勉強会やカンファレンスを実施する際に、無理のない頻度で実施する、担当者はもちまわりとする、率直に発言できるように発言を否定しないなど、ルールをつくる
- 職場が実践を通じた協働による学習の場となるよう取り組むには、自分から障壁をつくることをせず、できることから始めること、協働の相手とむきあっていくことが肝要と思われる。

6) まとめにかえて

職場や地域の中で学び続ける文化を維持し、発展させることを目指す本プロジェクトは、①実践者が主役となり、つながり、実践上の課題と向き合いながら企画運営をしていくこと、②さまざまな専門性と役割をもち、あるいは多様な成長段階にあるものが集うこと、③得られた実践知を集約し、共有できる形にしていくことによって成立してきた。

なによりも、9年間にわたる取り組みの中でつながり、ともに成長してきたスタッフ及び支援してくださっている関係者の皆様に心から感謝すると共に、残された課題について真摯に取り組んでいきたい。こうした取り組みが、保育士や教師のキャリアパスの確立につながることを願っている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

- ・ 甲斐恭子, 関佳子, 谷川弘治: 子どもの療養生活にかかわる看護師・保育士・教師が作成した個別支援計画の現状と課題. 小児保健研究, 75(4), 2016, 511-518
- ・ 谷川弘治: 病棟保育における実践過程の評価について-対話モデルによる分析試論. 医療と保育, 16(1), 2018: 8-16

[学会発表](計7件)

- ・ 文屋典子・豊永絵里・谷川弘治: 小児医療フィールドで働く教師と保育士の言語表現に関する研究, 日本医療保育学会第20回総会・学術集会抄録集 2016, 40
- ・ 甲斐恭子, 濱中喜代, 小林京子, 小野鈴奈, 谷川弘治: 小児医療の現場における多職種連携の現状と課題~医療従事者・保育士・教師間のフォーカスグループインタビューから. 第64回日本小児保健協会学術集会, 2017
- ・ 小林京子, 甲斐恭子, 濱中喜代, 小野鈴奈: 小児医療の現場での多職種連携していくために看護師に求められる力. 日本小児看護学会第27回学術集会, 2017
- ・ 谷川弘治: 医療保育における実践過程の評価について~対話モデルによる分析試論. 日本医療保育学会第22回総会・学術集会, 2017
- ・ 甲斐恭子, 濱中喜代, 谷川弘治: 特別支援教育担当教員の小児医療における協働・連携. 日本育療学会第21回学術集会, 2017
- ・ 谷川弘治: 多職種で学び合う地域ネットワークづくりからみた大学の役割. 大学評価学会第15回全国大会, 2018
- ・ 谷川弘治, 小野鈴奈: 病棟保育における実践過程の評価に関する研究-対話モデルによる2~5歳児のエピソード記録の分析-. 日本医療保育学会第23回総会・学術集会, 2018(発表予定)

[図書](計6件)

- ・ 山口(中上)悦子, 谷川弘治: 多職種合同ワークショップ「病気の子どものトータルケアセミナー」研修プログラム集第5集: 安全管理と感染管理の理解 自信を持ってかかわるために. 2016, http://kota.la.coccan.jp/index_seminar.html
- ・ 山口(中上)悦子, 谷川弘治: 多職種合同ワークショップ「病気の子どものトータルケアセミナー」研修プログラム集第6集: 子どものための夢の病院をつくらう~改善活動の手法を学び, 実践に活かそう. 2016, http://kota.la.coccan.jp/index_seminar.html

- 谷川弘治:多職種合同ワークショップ「病気の子どもへのトータルケアセミナー」研修プログラム集 第7集:子どもの遊びと遊び活動. 2017,
http://kota.la.coocan.jp/index_seminar.html
- 谷川弘治, 文屋典子, 豊永絵里:多職種合同ワークショップ「病気の子どもへのトータルケアセミナー」研修プログラム集 第8集:表現力を高める 医療現場での対話と実践を振り返り,共有するために. 2017
- 濱中喜代, 甲斐恭子, 小林京子, 小野鈴奈, 谷川弘治:多職種合同ワークショップ「病気の子どもへのトータルケアセミナー」研修プログラム集 第9集:小児医療の現場で多職種が連携・協働していく為に求められること, 2018,
http://kota.la.coocan.jp/index_seminar.html
- 原純子, 吉川由希子, 大阪セミナースタッフ:多職種合同ワークショップ「病気の子どもへのトータルケアセミナー」研修資料集第1集 子どもと遊び 遊びのイロハ~子どもにとっての遊びの本質とその必要性を見つめよう!. 2018,
http://kota.la.coocan.jp/index_seminar.html

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等

たにやんのホームページ

http://kota.la.coocan.jp/index_seminar.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷川弘治 (TANIGAWA, Koji)

西南女学院大学・保健福祉学部・教授

研究者番号: 80279364

(2) 研究分担者

山口 (中上) 悦子 (YAMAGUCHI, Etsuko)

大阪市立大学大学院・医学研究科・准教授

研究者番号: 60369684

濱中喜代 (HAMANAKA, Kiyoko)

岩手保健医療大学・看護学部・教授

研究者番号: 70114329

(3) 連携研究者

吉川由希子 (YOSHIKAWA, Yukiko)

敦賀市立看護大学・看護学部・教授

研究者番号: 50269180

甲斐恭子 (KAI, Kyoko)

岩手保健医療大学・看護学部・助教

研究者番号: 50756963

永吉美智枝 (NAGAYOSHI, Michie)

東京慈恵会医科大学・医学部・講師

研究者番号: 30730113

小林京子 (KOBAYASHI, Kyoko)

聖路加国際大学・看護学部・教授

研究者番号: 30437446

小野正子 (ONO, Masako)

西南女学院大学・保健福祉学部・准教授

研究者番号: 50255957

文屋典子 (BUNYA, Noriko)

西南女学院大学・保健福祉学部・講師

研究者番号: 00279366

大重育美 (OOSHIGE, Narumi)

日本赤十字九州国際看護大学・看護学部・教授

研究者番号: 70585736

西牧謙吾 (NISHIMAKI, Kengo)

国立障害者リハビリテーションセンター・病院長

研究者番号: 50371711

斉藤淑子 (SAITO, Yoshiko)

都留文科大学・教養学部・特任教授

研究者番号: 30817755

(4) 研究協力者

小野鈴奈 (ONO, Reina)

総合母子保健センター愛育病院・

医療保育専門士

豊永絵里 (TOYONAGA, Eri)

国立病院機構宮崎病院・保育士

足立カヨ子 (ADACHI, Kayoko)

全国病弱教育研究会・事務局

高橋陽子 (TAKAHASHI, Youko)

東京都立鹿本学園・小学部・教員